毛利元就

上

内館牧子

NHK出版

毛利元就 上

内館牧子

NHK出版

毛利元就 上

一九九六年十二月　七　日　第一刷発行
一九九七年　二　月二十八日　第六刷発行

著者……内館牧子
ノベライズ……三原庸子
発行者……安藤龍男
発行所……日本放送出版協会
〒一五〇-八一東京都渋谷区宇田川町四一-一
電話〇三-三七八〇-三三八四(編集)
〇三-三七八〇-三三三九(営業)
振替〇〇一〇-一四九七〇一
印刷・製本……図書印刷(株)

落丁・乱丁本はお取り替えいたします。定価はカバーに表示してあります。
〈日本複写権センター委託出版物〉
本書の無断複写(コピー)は、著作権法上の例外を除き、著作権侵害となります。
©1996 Makiko Uchidate Printed in Japan
ISBN4-14-005259-7 C0093

一・四五六円

毛利元就 上

装幀……芦澤泰偉

装画……奥田元宋「吉野」より

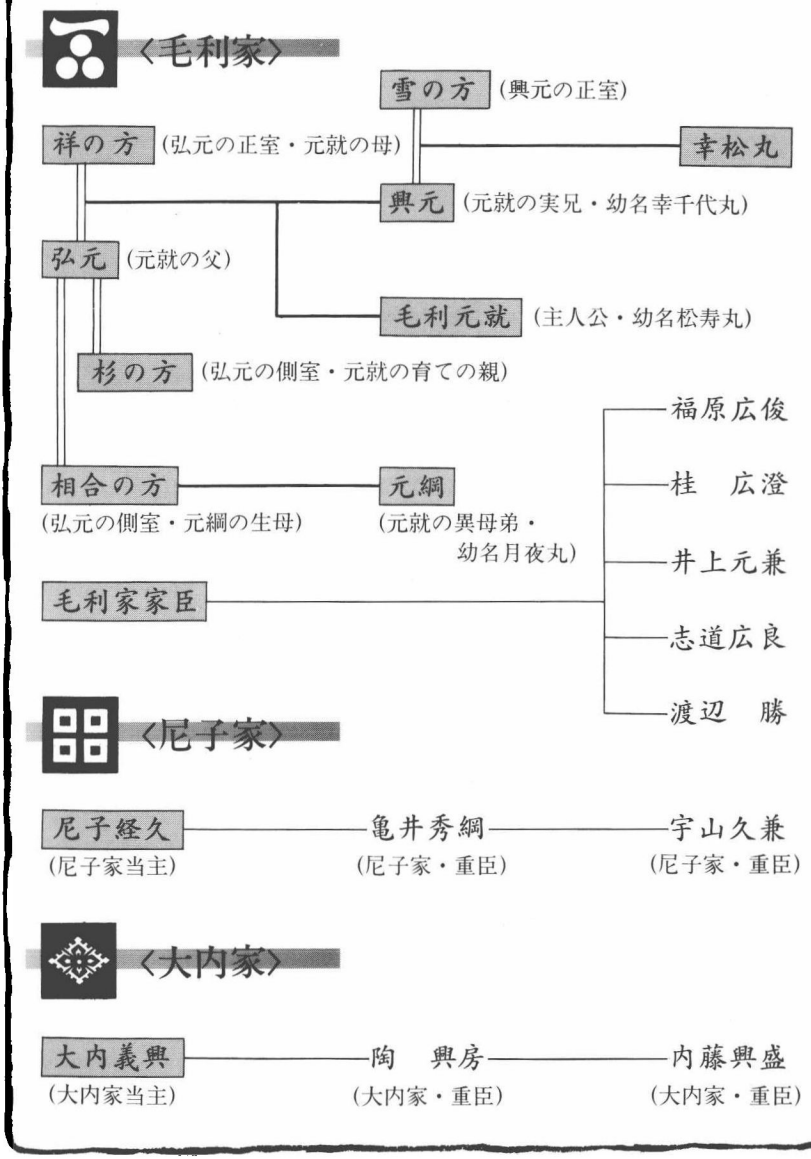
此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

毛利元就

目次

母の死・父の死 …… 5
城主失格 …… 73
恋心 …… 154
興元の死 …… 178
初陣 …… 295

主な登場人物の関係図


〈毛利家〉
雪の方 (興元の正室)
祥の方 (弘元の正室・元就の母)
幸松丸
興元 (元就の実兄・幼名幸千代丸)
弘元 (元就の父)
毛利元就 (主人公・幼名松寿丸)
杉の方 (弘元の側室・元就の育ての親)
福原広俊
相合の方 (弘元の側室・元綱の生母)
元綱 (元就の異母弟・幼名月夜丸)
桂　広澄
井上元兼
毛利家家臣
志道広良
渡辺　勝
〈尼子家〉
尼子経久 (尼子家当主)
亀井秀綱 (尼子家・重臣)
宇山久兼 (尼子家・重臣)
〈大内家〉
大内義興 (大内家当主)
陶　興房 (大内家・重臣)
内藤興盛 (大内家・重臣)

母の死・父の死

明応八年（一四九九）秋。

月の光に中国山脈の山並みが、影絵のように黒く浮かび上がっている。

その底知れない静けさを抱き込んだような黒々とした中腹に、奇妙に動く一点の光があった。それはひっそりとした明かりだったが、目をこらすと、とどまりもせず、消えそうでいて消えず、ゆっくり南のほうへと進んでいた。

「松寿丸、どこにおるのじゃ！」

早鐘と馬のいななきが聞こえる中、祥の方が叫びながら廊下を走っていく。

「松寿丸！　松寿丸！　……どこにおるのじゃ、松寿丸！」

必死で松寿丸を探して走る祥だが、我が子を思いやる気持に、伏せっていた力のない体がついていかず、その足取りは今にも崩れそうでおぼつかない。

あちこちで篝火が焚かれていたが、棟門のあたりで焚かれている篝火の明かりが館を明るく照らし出し、祥の血の気のない細い顔を白く浮き立たせている。

ここは毛利氏の本城、郡山城である。

「松寿丸は……」

苦しそうにあえぎながら弘元の居間に入ってきた祥は、すがるように尋ねた。

「松寿丸？　ここにはおらぬが」

家臣に手伝わせながら鎧を着けている弘元が答えた。郡山城の城主、毛利弘元である。

弘元の横には、既に鎧を着けた福原広俊が座っていた。広俊は祥の父であり、弘元には義父にあたる。

祥を見やった広俊の顔が心配そうに曇ったが、それも一瞬で、肩を落として座り込んでしまった祥のそばに幸千代丸が駆け寄ると、何事もなかったかのように無言ですっと弘元のほうへ顔を戻していた。

幸千代丸は、祥の薄い肩をなでていた。

幸千代丸は、弘元と祥の間に生まれた毛利家の嫡男で、まだ七歳だったが、四歳下の弟である松寿丸が利かん気で自由奔放に振る舞っているのに対し、年よりはるかにしっかりしていて、その落ち着いた振る舞いに弘元は満足し、将来を楽しみにしているのだった。それだけに、祥にしてみれば、がむしゃらな松寿丸がかわいく、また気にもかかるのだった。

そんな祥と幸千代丸を見て、弘元は言った。
「病の身、無理してはならぬ。休んでおれ」
「このようなとき、松寿丸をそばに置かねば……」
また立ち上がりかけた祥の体が、ぐらりと揺らいだ。
「母上、私が探してまいります」
母の気持を察した幸千代丸は、「心配しないで、お任せください」というように祥の顔を見つめ、部屋を出ていった。
庭先には、米や味噌が次々と運び込まれていた。その真ん中に立ち、
「ありったけ運び込めッ。搦手にも兵を回せッ。急げッ！」
井上元兼が大声で指示している。
その元兼の雄々しい動きを横目で見ながら幸千代丸は弟を探したが、「松寿丸ーッ」と呼ぶ声も、兵たちの慌ただしい動きの中で消えそうだった。
だが、幸千代丸の声は松寿丸に届いていた。庭の片隅にじっと身を潜め、兄が通り過ぎるのを見ていたのだ。手書きの「一文字三星」旗と五、六個の握り飯を抱えていた。炊き出しで騒然としている台所から失敬してきたものだ。
「兵助ーッ」
元兼が呼ぶと兵が二人、元兼の前に走り出た。

「兵助、石見路に物見を急げッ」
「はッ」
返事と同時に駆け去る二人を見送って、松寿丸は立ち上がった。そして、後を追うように門のほうへ駆け出した。篝火に照らされて高揚している兵たちの中に、松寿丸のことなど気にする者はいなかった。元兼が重臣たちのもとへ発した伝令にこたえて、兵の一団が既に到着し始めていて、彼らの発する土臭い熱気のようなものが、松寿丸の気持をいっそう高ぶらせていた。
「松寿丸ーッ」
兄の呼ぶ声がまたどこかで聞こえたようだったが、松寿丸は一気に城門の外へ駆け出していた。旗と握り飯を落とさないように、ただそれだけに気をつかっていた。この松寿丸こそ、のちの元就である。
城から離れた松寿丸は、一気に夜道を突っ走った。幼さを感じさせない堂々とした走りだった。いつの間にか、後ろにはいつもの仲間が続いていた。いや、仲間というより家来だった。どの子ども松寿丸よりはるかに年上だったが、一様に手書きの一文字三星旗を持ち、松寿丸が与えた握り飯にかぶりつきながら走っていた。
山道をどのくらい走ったろうか。大木が一本だけそびえている原っぱに出ると、松寿丸は足を止めて振り返った。家来たちも立ち止まり、なんとなく松寿丸を囲むように立った。
「今日こそ、平家の亡霊を成敗いたす」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

精いっぱい大将を気取った松寿丸が、甲高く一同に宣言した。松寿丸の手には、手作りの弓矢が握られていた。家来たちも、武将気取りでうなずいた。それを満足げに見た松寿丸はまた山道へ向けて走り出し、家来たちもその後に続いた。満月の青い光が、向こう見ずな子どもたちの背丈を高く伸ばして影を引いている。だがその姿も、すぐに山道に消えていった。

郡山城の広間では、軍装の弘元の前に、これも軍装を整えた重臣たちが居並んでいた。

一様に緊張した面持ちの一座の中で福原広俊だけがじっと目を閉じていたが、五十歳を前にして皺を刻み始めたその朴訥な容貌が座の雰囲気をわずかに和らげていて、弘元にとってはそれがありがたかった。弘元が広俊に本心を明かせるのも、容貌と違わぬ朴訥な人柄が信用できるからだ。

「桂殿が、いまだ見えられませぬが……」

井上元兼が誰にともなく言いながら、せかせかと入ってきた。そのいらだった様子から、わざわざ桂広澄の到着を見にいってきたようだと弘元は察した。

元兼が広澄を待っていたのは、広澄への信頼の厚さからではなかった。表面にこそ出さないが、二人はいわば弘元を挟んで対立した立場にあり、成り行きによっては弘元の後を奪い合う立場にあるとさえいえた。

この時代、世の中は室町幕府の力が弱まって下剋上の戦国時代が始まったばかりで、天下は混

迷し、勢力拡大を狙ってあちこちで大小さまざまな戦さが展開されており、父子兄弟の間でさえ分裂や裏切りが頻繁に起きているありさまで、主従の間でも、揺るぎのない絶対的な主従関係が結ばれているというわけではなかった。

井上一族は、元兼の父である光兼（みつかね）の代から毛利氏に仕えるようになったもので、福原氏や桂氏といった名家の中にあっては、いわば新参者である。とはいえ、元兼の働きぶりが弘元から重く用いられているのも事実だった。

「殿、桂殿が見えられませぬが、軍議を始められてはいかがでございますか」

一座の中で口を開いたのは元兼だった。

「いや、もうしばらく……」

なだめるような弘元の口調に、元兼は顔を伏せ、「何ゆえに来ないのだ」とつぶやいた。

それからまた、一座は沈黙した。

その静まり返った重い空気の中に、兵たちが発しているざわめきだけが、音というより振動のように伝わってきていた。

「これ以上は待てませぬ。いかがでござる、渡辺殿」

再び元兼が口を開き、弘元から渡辺勝（すぐる）へ、賛意を促すように目を移した。

勝は、戦さにかけてはその戦術・武術の巧みさにおいて右に出る者がないといわれ、平時にあっても鎧帷子（かたびら）を着けているような男である。いかなるときにも感情を表さない無表情な反応が、

接する者に冷徹な凄みを感じさせる。
元兼の問いかけに、勝がその無表情な顔を向けたとき、
「桂殿、お着きにございます」
近習の声がして、広澄が入ってきた。意図したような悠然とした歩みだ。それに、平装である。
「桂殿、長らくお待ち申しておりました」
元兼にすれば精いっぱいの皮肉だった。
広澄はその言葉を無視するかのようにゆっくりと座り、弘元に一礼し、それからおもむろに口を開いた。
「井上殿、この馬鹿騒ぎ、なんたることじゃ」
広澄が向けた見下したような目を、元兼もがっちり受け止めていた。早々とそこだけ静かな火花が散り始めたのを見て、広俊がとりなした。
「ま、ま。にらみ合っている場合ではござらぬ。敵が攻めてくるのでござる」
「敵？　誰がでござる」
広澄がきょとんと、芝居がかった言い方で聞くと、
「尼子経久！」
と、言下に元兼が答えた。
「尼子経久!?　……は、は、は」

唐突な笑いだった。
それを見て、むっとしたように元兼が続けた。
「尼子経久、備後路を南下。今宵、我が領地をうかがう由」
「井上殿、尼子経久は今、出雲制圧に忙殺されておるのだぞ。何ゆえ、このあたりに現れるのじや」
「それがしが放った間者より、知らせがござった」
「尼子経久か。これはいい。ふ、ふ……は、は、は」
再び不遜な笑いを受けた元兼は、怒りを抑えるのに必死である。
席に座した一同は、そんな二人の成り行きを黙って見つめるばかりだった。
「今宵は満月。そちの間者は、平家の亡霊にたぶらかされたと見える」
相変わらず、馬鹿にしたような広澄の口ぶりだった。
「なんとッ」
「満月の晩、馬に乗った平家の落ち武者の亡霊が出ると、もっぱらの噂。たぶらかされますなと、先に言うておけばよかったのう」
元兼の怒りをあおるように、広澄はまた続けた。
「井上殿、尼子経久の影におびえて兵を動かすは、物の怪におびえるこわっぱ同然。……見よ、敵は来ぬではないか」

「……」
元兼は反論もできずに広澄をにらみつけている。
広澄はそんな元兼から、
「のう、渡辺殿」
と、勝に目を移した。それへ、無表情な目で勝がうなずいた。
我が意を得たりとばかり、また広澄は言った。
「なんの確証もないものを。見苦しい」
それを聞いて、
「なれど」
勝が広澄を見た。
「尼子経久、相手の心を読み、鮮やかな奇襲を仕掛ける武将。芸人衆に化け、一夜にして城を落としたる恐ろしき策士にござる。今宵のこと、戦さ稽古と思えば腹も立ち申さぬ」
「何が稽古でござるか」
広澄はじろりと勝をにらむと、元兼に聞かせるように言った。
「我が毛利にあって、殿から兵馬の指揮を任されているはこの桂。拙者の許しなく、早鐘にて兵を動かすは、たとえ稽古と申しても分限を越えたる無法。越権じゃッ」
これを聞いて元兼が弁解した。

「此度のこと、危急ゆえ、殿にお許しをいただき、早鐘打ちたるしだいにござる」
すると、
「殿！」
と、広澄が弘元を見た。
弘元は広澄に見つめられて、力なく答えた。
「危急と判断したゆえ……許せ」
「それがしが、浅はかにも出すぎた真似をしたとおっしゃる」
それはないであろうと言いたげに、今度は元兼が弘元を見据えた。
「いや、何もそのような……」
弘元の目が弱々しく泳いだ。
「そうおっしゃられては、この元兼、武士として面目が立ちませぬ。兵を引き、しばし謹慎いたしまする。ごめん」
座を蹴るように立ち上がった。
「元兼！」
弘元が慌てて呼びかけたが、足を止めなかった。
それを見て、広俊が元兼を追った。
「井上殿。待たれ待たれ……待たれいッ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com